



毎月第3月曜日の19時から 旅路の里2階ホールで英神父の司式で「いやしのミサ」を捧げています。毎月20～30名が参加し、カトリック信者だけでなく、プロテスタントや未信者の方、釜ヶ崎地域の方、アパートを営業者、地域の支援者、東京はじめ遠方からの参加者やお手紙で意向を送られる方もいます。

時々、「なぜ釜ヶ崎でいやしのミサ?」「いやしのミサってなに?」と聞かれます。

正解はわかりませんが、参加される方の豊かな人生経験、困難やつらい思いを越えてこられた方からその答えに接することがあります。

「神様はこのミサを通して、一人ひとりにお恵みをくださる。私たちがその恵みでいやされ、この地域に広げていく。特にこの地域は、心や体のいやしが必要な場所だから」「釜ヶ崎のおっちゃんを通して、キリストを感じている私たち。このミサでいただきたいいやしが、それぞれの生活の場、活動の場で広がると感じる」という声もあります。ミサで、お手紙で、このような思いを共有できることが恵みだなと思っています。(江見)



HPのキャラクター
たび次郎

旅路の里から

ご協力ください

短い秋がおわり、朝夕寒さを感じるようになりました。「越冬」といわれる年末年始から3月初旬までの時期は夜回りの時期も増えます。昨年は越冬時期に野宿者の死者をだすこともありませんでした。ただ、公園でテント生活をされている方が急に寒くなった夜、火事により亡くなりました。様々なグループが夜回り、朝や午後にも尋ねるグループや個人もあります。寄付金、およびよまわりのための毛布やカイロ、炊き出しのためのお米や食品をはじめ、支援物資のご協力をよろしく願いいたします。いただいた物資はキリスト教協会やネットワークの夜回り、炊き出しを行う団体、他にも訪問看護や介護、就労支援の団体に役立てていただいています。

寄付金の宛先：郵便振替 00920-3-56487 宗教法人カトリックイエズス会 旅路の里

ご参加ください

- **いやしのミサ** 毎月第3月曜日19時から旅路の里2階でおこなっております。変更があった場合はホームページでお知らせいたします。また、いやしの意向はメール、書面でお願いいただけると、ミサでお祈りさせていただきます。
- **旅路トークサロン** 参加無料、関心のある方どなたでもご参加ください。

12月13日(木) 18時30分～20時30分

おはなし：中野まり子さん(わてらと釜ヶ崎)

60年代後半にパレスチナ難民キャンプでのボランティア活動を経て、70年代から釜ヶ崎で活動を続けてこられたまり子さん。女性グループを立ち上げ、共に学び、ほぼ男性社会の釜ヶ崎の中で女性の視点をもって声を上げ、積極的な役割を共に果たしてこられました。様々な時代の釜ヶ崎について、そして今に至る思いをうかがいます。

1月以降のトークサロンの日時はホームページにてお知らせいたします。サロンの後に21時からの「夜回り」に参加できます。夜回り参加希望の方は必ず事前にご連絡下さい。1月以降も準備しております。ホームページでお知らせいたします。

旅路の里ニュースレター 2025年11月号 発行：旅路の里

〒557-0004 大阪市西成区萩之茶屋 2-8-9

電話：06-6641-7183 Mail: tabijinosato1@gmail.com HP: https://tabijinosato.org



旅路の里ニュースレター

2025・11 特集 釜ヶ崎の「よまわり」について

善きサマリア人の働き

ハナフサ リュウイチロウ
所長 英 隆一郎 (イエズス会司祭)

クリスチャンにとって、「よきサマリア人のたとえ話」(ルカ10:25-37)はよく知られている話だ。律法学者との論争から、誰が隣人かという問いかけに対して、イエスが語られたたとえ話である。道ばたで倒れている旅人を見て、祭司やレビ人は見て見ぬふりをして立ち去るが、よきサマリア人だけが隣人として、その旅人を介抱して助ける話である。現代社会の中でも、よきサマリア人のような活動に携わっている人たちがいる。

その一つは、釜ヶ崎で日常的に行われている夜回りではなかろうか。夜回りでは、実際に路上に寝ている野宿者に声をかけ、ちょっとした食物や飲物、日用品(冬場はマスクやカイロ)などを配布している。場合によっては本人から話をよく聞き、さらに必要なものを手配することもある。緊急の場合にはシェルターに連れて行ったり、さらに救急車を呼んで付き添うこともある。生活保護につなげ、野宿生活からの脱却を手伝うこともある。実際に倒れている人を直接支援することは、まさに現代のよきサマリア人の行為だと言えるだろう。今でもいくつかの支援団体が釜ヶ崎周辺で地道に夜回りを続けている。

たいぶ前の話、路上に野宿者があふれていた頃である。ある時私が夜回り中に、テント生活している一人の男性と立ち話になった。その男性は次のような話をしてくれた。「自分は履歴書が書けへんねん。履歴書が書けへんから、普通の会社に就職できへん。肉体労働で生活してたけど、年をとったら誰も雇ってくれへんねん」という話だった。路上で生活している人にはそれなりの理由がある。彼の場合は字が書けないという問題もっていた。たとえ話に出てくる旅人は追いはぎに襲われて、路上で倒れていた。現代社会の追いはぎもいろいろとある。この野宿者が若い頃に教育を受けられなかったことも一種の追いはぎではなかろうか。日本社会が識字率100%というのは幻想で、釜ヶ崎では字を書けない労働者に何人も出会った。だいたい中卒という人は漢字がほとんど読めず、書けなかった。いつの時代も犠牲となる人びとがいて、彼らが真っ先に路上で倒れるのだ。

夜回りをする中で、さまざまな出会いがあり、気づきがある。倒れている人の隣人になることで、社会の矛盾が見えてくるし、何が本当に大切なことかも教えられる。彼との出会いをきっかけに結局、識字教室(読み書きが十分にできない成人が字を学ぶ教室)を始めることにつながっていったのだが(また機会があれば、そのことも記したい)。

これから寒い季節になってくる。この寒空の下、今夜も路上で寝ている人がいる。何らかの理由で倒れてしまい、そこに寝ざるをえないのだ。彼らがなぜそうってしまったのか、どうすればそこから脱却できるのか、そのようなことを考えながら、現代のよきサマリア人たちが今夜も夜回りを続けている。



釜ヶ崎の「よまわり」について

住む家がある、安心して眠れる場所があることは人間の基本的な権利の一つです。釜ヶ崎では70年代から路上で夜を過ごし、眠る人々を訪ね見守る「よまわり」がありました。その背景と、現在の意味について考えてみたいと思います。

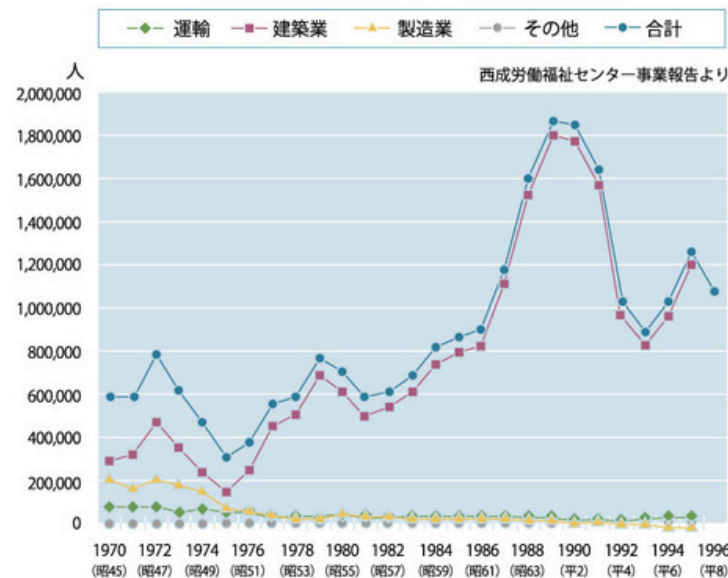
70年代～

1960年代から経済成長と共に釜ヶ崎には全国から仕事を求めて人々が集まってきました。「日雇い労働」は元気で、仕事があり、事故もトラブルもなく稼ぐことができればよいのですが、病気やケガだけでなく天候不順や職場での問題で仕事につかなければ、生活難となり野宿に追い込まれることとなります。また1973年からのオイルショックなど景気の動向にも真っ先に影響されました。特にお盆と、年末年始は一齐に工事現場が止まるため、物理的にも経済的にもドヤ(簡易宿所)にとまることのできない労働者が溢れました。

「越冬闘争」はこのような釜ヶ崎の事情からはじまりました。そして、その中で欠かせないのが、「炊き出し」と「夜回り」(医療パトロール)でした。お酒で厳しい寒さをしのごうとしたまま路上で寝込んで凍死の危険にさらされ、栄養失調で動けなくなった人もいて、毛布を積んだりヤカーには、弱った人を運ぶ役目もありました。(これは現在まで続いています)。70年当初には行政による越年対策(プレハブの宿舎を用意する)はなく、越年対策がはじまっても釜ヶ崎とかけ離れた南港に設置され施設環境も十分ではありませんでした。また、当時は地方からの出稼ぎで住民票の無い労働者に福祉の手立てはなく、労働組合やキリスト教団体をはじめとする市民団体の支援の必要がありました。

バブル崩壊と野宿

西成労働福祉センター現金求人推移



図はセンターのできた1970年からの釜ヶ崎の求人数のグラフです。日雇い労働は60年代には製造業も多くあったのですが、70年代には機械化が進み、求人数が減るいっぽうで建築業は伸び続けました。特に80年代後半の伸びは異常ともいえますが、日本のバブル景気が不動産バブルであったことを考えるとうなずけます。そして1991年を境に、求人数は激減します。単に減っただけではありません。70-80年代に30~40代で釜ヶ崎にやってきた労働者たちの多くは50才を越える年齢になっていました。他の仕事では50代は技術も経験もある

稼ぎ頭なのですが、日雇いの建築業では仕事をもらえない、減ってしまった仕事につくことができたのは経験の無い若い労働者の方だったのです。50代も半ばになるとほぼ、失業状態になりました。そして、どっと野宿者が増えました。地域内ばかりでなく近隣の公園に、駅やセンターの軒下にと数100名単位で、支援の布団や毛布にくるまって寝るしかない人々が溢れました。

その時期には労働組合とキリスト教協友会ほか4団体と個人による共同で「寝る場所」と「仕事」を求める運動(反失連)を展開し、大阪市役所や大阪府庁の前でテントを立て、野営という野宿デモを行いました。10年にわたる数週間から数か月の断続的な「野営」と行政との交渉が重ねられました。その過程で断続的ながら夕方にはシャッターで閉じられていた労働福祉センターの中で野宿ができるようにする「夜間開放」が始まり、55才以上が登録制で地域内外の道路清掃や公園整備などの作業を行い報酬を得る「高齢者特別清掃事業」が94年からはじまりました。あふれる野宿者の実情を背景にみんなで働きかけた結果、2000年に600名が宿泊できるシェルターがつけられました。その間にも多くの凍死者が続いたばかりでなく、90年代からは若者グループによる「襲

撃」といわれる野宿者に火をつけたり、冬の川に投げ込んだりという殺人に至る事件も続き、野宿者への偏見や本当に困った人に制度を使わせない社会の在り方が、命を奪っていきました。

今に至る道

バブル崩壊以降の貧困状況に対応するホームレス自立支援法(2002)、リーマンショックで全国に広がった貧困状況が後押しした生活困窮者自立支援法(2013)など、社会的な支援の枠組みが進んだ一方で、釜ヶ崎では大阪府・市に支援を要望する活動は続きました。その間労働者の高齢化も進み、現在では多くの元労働者が年金や生活保護を得てアパートに居住しています。それでも「働く人のまち」として年金の不足を特掃や空き缶集めで働く人々がここで生活しています。



【上記写真について】
とある日の「よまわり」(越冬闘争医療パトロール、木曜夜回りの会)

福田紀子(旅路の里コーディネーター)

釜ヶ崎の夜回りグループ

釜ヶ崎越冬闘争実行委員会医療パトロール

今年56回目となる年末年始の「越冬闘争」。その期間7~9日間毎晩連続して行われる夜回りです。「わてらと釜ヶ崎(わてかま)」という女性グループがリーダーとなり、リヤカーに「越冬ニュース」や毛布、おにぎりなどを積み込んでまわっています。越冬支援に集まる年齢も経験も様々な人々とともに野宿者に声をかけ、毎晩の変化をみまもりながら、活動を続けています。

社会福祉法人暁光会大阪支部

50年ほど前からでしょうか、車で4、5名のメンバーで日本橋、難波、釜ヶ崎のセンターまわりを回っています。翌日も仕事があるので、参加メンバーの負担を少なくするように、10年単位で長く続けられるようにと考えています。(森下)

木曜夜回りの会

旅路の里を起点に80年代から、人をつなぎながら続けています。基本はものを配ることを目的にはしていませんが、夏には冷たい飲み物や冬にはあたたかいスープを持っていくこともあります。始まったころには社会的な支援もなく、翌日に病院や役所に同行する活動も行い、居宅(生活保護)につながった方々と一緒に遠足やお花見をするような活動もしていました。

関西労働者伝道委員会

関西労働者伝道委員会は、労働の現場とキリスト教を考える中で釜ヶ崎での活動にかかわりを持つようになった委員会です。日本基督教団の京都・大阪・兵庫教区を中心とした信徒/教会教師で活動してきました。長らく医療連の大谷隆夫さんが活動されていましたが、現

なぜ野宿を

現在の野宿者は地域内で約30余名と思われませんが、高齢という年齢に達している方も少なくありません。若い世代や海外からのボランティアからは「なぜ福祉の制度を利用しないのか?」という問いを受けることもあります。

その理由は一人一人にあるのだと思います。時には猫と一緒にすごしたいから、アパートの隣人とうまくいかないから、などという声をきくこともありますが、本当の背景はわかりません。数10年にわたって福祉や労働関係の社会制度から疎外され続けた経験も理由の一つにあるかもしれません。

夜回りのときには「体調」や「必要なこと」を伺います。体調がすぐれない様子を訴えられて、病院につなぐ場合もありますが、入院や救急搬送を断られることもあります。

親しくはなくとも近くで野宿している方から「あの人、調子悪そうやで。たしかめたって」と依頼されることもあります。「俺なんか」という自分を卑下する言動に合うこともあり、言葉を交わす場面もあります。グループによっておにぎりや食糧を配ったり、声をかけて必要な方に毛布・マスクやカイロを渡すだけのこともあります。

孤独な路上生活にも釜ヶ崎ではなんらかのつながりがあるのだと感じています。一人の人として尊重され、生き方を貫きながら命を守ることができるよう、安否を確認し必要な時には手立てを行いながら様々なグループが夜回りを続けています。

在の委員会インターンが引き継いで関西労伝で夜回りを継続しています。通常は月2回。人集めや継続についての不安がありますが、喜望の家に集合して夜回りをするようになりました。現在は関西学院大学の学生や若者10名を中心に、それ以外にも10人くらいの参加があります。

月に2回では、受けられる相談も限られています。おにぎりも配っていますが、それだけで人間は生きていけません。意味がないと言われるかもしれませんが、参加者の姿勢に共に生きるという未来を感じています。(柘田)

こども夜回り

山王こどもセンターは月1回通年で、こどもの里は1月~3月初めまでの越冬時期に毎週子どもたちと一緒に夜回りを行っています。

野宿者ネットワーク

1995年道頓堀事件*をきっかけに結成。毎週土曜日に釜ヶ崎地域内ばかりでなく、心斎橋、難波、日本橋他も回り始め、襲撃や追い出しに抗議し、野宿者への支援情報の提供などを行っています。特に西成公園で野宿をしている方々とは継続的な交流を重ねています。

*道頓堀戎橋で廃品回収をしながら野宿をしていた藤本さんが若者に道頓堀に投げ込まれ死亡した事件。

【野宿者ネットワーク】

<https://lastdate.verse.jp/network.htm>



このほかにもいこい食堂、センター解放行動、釜ヶ崎芸術大学(ココルーム)は夜回りを、ふるさとの家や愛徳姉妹会は朝・昼回りを行っています。